ペルセポリス王室経済圏における馬群管理

川瀬 豊子^{*}

ABSTRACT Toyoko KAWASE, *The Management of Horses in the Persepolis Royal Economy*: The Persepolis Fortification texts, which cover the period from the 13th to the 28th year of Dārayavau- I (509–494 B. C.), are very helpful source materials for elucidating the management of horses in the possession of the royal household.

The Persepolis public administration of this period showed positive concern about control of horses. They were an indispensable factor in organizing and maintaining the far-flung empire.

The Fortification texts record that horses were fed with barley fodder. Each adult horse consumed 3–10 QA of barley per day, and each foal 1–3 QA. These texts refer to the extra ration of grain, wine, beer and other food products, amount of which is much smaller than that of the regular daily ration.

The public administration assigned the men called *mudunra* horses for official affairs, and stationed the *mudunra* men in grazing land near the districts where horses would be more frequently needed. The *mudunra* men were engaged in taking daily care of horses, by themselves or with their assistants. In order to meet the changing demand for horses, the public administration sometimes moved the *mudunra* men and the horses under their charge to other areas. Evidently the *mudunra* men played a key role in establishing the effective system for the use of horses as the means of traffic and communication.

I

ハカーマニシュ朝（アカイメネス朝）発祥の地イラン高原南西部のパールサ地方は、ダーラヤワウ1世（ダレイオス1世，在位前522—486）が誇るように「よき馬とよき人に恵まれた」地であり（e.g. DPd 6-9），それがペルシア人に古代オリエント世界全域を包括する大帝国の支配者としての地位をもたらし

* 樟蔭女子短期大学講師

た最大の原動力であったと言っても過言ではない。ダーラヤワウ1世自身、自らが馬上巧みに弓や槍を使いこなす優れた騎兵であると誇らしげに謳っている(DNb 40-45)。またヘロドトスはペルシア人の子供達が5歳から20歳まで乗馬・弓術・正直なることだけを教えられたと伝え(Hdt. I 136)⁽¹⁾、クセノフォンは徒歩を好まず馬術をきわめることに努めるペルシア人の慣習について言及している(Cyropaedia VIII viii 19)。その他にも前1000年紀のイラン高原における馬文化の発達を示す事例は数多い。まさに馬は、戦時・平時を問わずハカーマニシュ朝時代のペルシア人にとって幼少の頃から慣れ親しんできたよきパートナーであった⁽²⁾。それゆえ馬の飼育管理は、帝国の支配体制のみならず同時代のペルシア人社会を理解するためにも不可避の問題であると言えよう。

従来ハカーマニシュ朝時代の馬の利用については、もっぱらギリシア語文献や考古学史料に基づいて断片的にとりあげられてきたにすぎず⁽⁴⁾、馬群管理の実態は必ずしも明らかにされてはいない。本稿の目的は、ペルセポリス出土の城砦文書を手がかりに、すなわち何よりもまずペルシア人自身の報告に基づいて⁽⁵⁾ダーラヤワウ1世治世下のペルセポリス王室経済圏(エラム東部・パールサ)における王室所有の公用馬の管理と利用状況を考察することにある。ただし城砦文書の研究は、なお数多く残されている語義不明の単語や未公刊テキストの存在のために困難も多く、かつ研究者の関心もいまだ限られた領域にしか及んでいないのが現状である。馬群管理という観点から城砦文書に対する体系的なアプローチがおこなわれたことは、これまでまったくなかったと言ってよい。したがって本稿は筆者のハカーマニシュ朝における馬群管理システム分析のための基礎作業のひとつとなるべきものである。帝国の統治行政機構の再編成を第一の課題としたダーラヤワウ1世治世下の、しかもハカーマニシュ朝発祥の地におけるこのケーススタディは、いくつかの新しい事実を提示することによって、帝国の全体像再構築のための試みに寄与することができるかもしれない⁽⁶⁾。

以下では、まず城砦文書にあらわれる馬(ANŠE.KUR.RA)および馬糧について概観し、ついで馬群管理に従事した mudunra と呼ばれる人びとについて検討する。

II

本稿でとりあげる城砦文書はダーラヤワウ1世第13—28年(前509—494)の王室の管理文書である。馬に関係するテキストのほとんどは大麦を中心とする

馬糧の支給記録である。馬糧受給者には自ら馬群の維持管理に従事した人びとのみならず、明らかに利用者とみなすべき王室官吏が含まれる場合もある。現在までに公開された城砦文書⁽⁷⁾2120点中、直接馬に言及したテキストだけで実に170点を抽出することができた。城砦文書に含まれる家畜の記録としては他に羊・山羊 (UDU.NITÁ), 牛 (GUD), 驢馬 (ANŠE), 騾馬 (PA.RU), 駱駝 (ANŠE.A.AB.BA) あるいは家禽 (basbas, ippur etc.) に関するものがあるが、馬の記録は他のどの家畜よりはるかに多く、このこと自体馬の利用に王室がきわめて積極的な関心をもっていたことを物語るものである。

このようなテキストの豊富な存在にもかかわらず、テキストに基づいて確認することのできる類別名称体系はきわめて簡単なものである。基本的に成馬 (berna, 大麦支給量 1 日 3-10QA, $1QA \approx 0.92l$) と幼駒 (punna, 大麦支給量 1 日 1-3QA) の2段階のスケールで成育段階が区別されるだけで、オス・メスの区別⁽⁸⁾もなければ、1例を除き年齢への言及もない。このことは繁殖あるいは当歳馬の馴致等が原則としてペルセポリス王室経済圏における馬群管理の対象に含まれていなかったことを示唆する。⁽⁹⁾去勢の有無や乗馬・輓馬の区別⁽¹⁰⁾にしてもテキストからは何も手がかりを得ることはできない。

しかし上述のようなテキストから知ることのできる類別名称の弁別基準の単純さは、必ずしも馬群管理の未発達を意味するものではない。表1は、同一馬群内の1日の大麦支給量の差を確認することのできる24のテキストを整理したものである。この表に明示される 0.5-15QA に及ぶ支給量の細別は、同一馬群を構成する各馬の管理に対して周到な配慮があったことを証明するものに他ならない。しかも berna「成馬」あるいは punna「幼駒」という同一タームで表示される馬群内においてさえ支給量の差が存在する。各馬の成育段階の正確な識別がおこなわれていたことは明白である。

また馬糧として日々の大麦飼料以外に、一種の栄養補給用と推定される特別支給⁽¹¹⁾がおこなわれていたことも注目に値する。通常の大麦支給が各馬の1日の消費量を基準に計算されるのとは対照的に、大麦その他の穀類、穀粉、ある種の穀物製品、ぶどう酒やビール等で与えられる特別支給の場合には馬群全体に対する月単位の支給量が記載されるにすぎない。一般にこの種の特別支給は毎日与えられるものではなかったとしても、1月の支給総量はいずれの場合もそれほど多くはない。また必ずしもすべての馬に与えられたのでもなかったようである。⁽¹²⁾おそらく各馬の成熟度、健康状態あるいは利用状況を考慮して支給量や

表 1

text	year	month ⁽¹⁾	barley per day (QA)														kind of horses	
			number of horses	15	10	8	6	5	4	3	2	1.5	1	0.5				
PF 1508	28	11	7	6* 1*													*berna	
PF 1570	23	11	10	6 4														
PF 1648		(2)	8?	1* 3? 1? 2 1													*berna	
PF 1659	22	1-2	12	10* 2*													*punna	
PF 1660	24?	11-12	5	2* 3*													*punna	
PF 1662	22?	8	13	9 4*													*punna	
PF 1673	22	4	10	7 3														
PF 1676	20	11	3	2 1														
PF 1683	22	8-9	2	1	1													
PF 1685		(4½)	10	1 7 2														
PF 1687		(1)	5	1 1 3														
PF 1688		1	3	1 2														
PF 1690	21	10	28	10 18														
PF 1691		11	4	2 2														
PF 1693	28	9-12	4	2 2														
		10-12	2	2														
PF 1697		(2)	4	2 2														
PF 1698		(8)	6	5 1														
PF 1942	19	10	4	3* 1*													*punna	
: 7-12																		
PF 1944	20																	
: 42-44		9, 11	3	1 2														
: 45-47		8, 12	3	1* 2*													*punna	
: 48-51		5, 7	3	1* 2*													*punna	
PF 1946	21	9	x+2	2														
: 52-54																		
PF 2060		(2)	5	1* 2 2													*berna	
PF 2064		10	4	2 2														

(1) () は月数を示す。

支給期間，受給馬が決定されたものと思われる。ここにも一頭一頭に対する注意深い観察と配慮をみることができであろう。

なお馬の弁別基準としては成育段階を示す上記ターム以外に，品種・馬体の特徴，あるいは利用目的・管理形態を説明すると考えられる以下のタームを検出することができる：bari⁽¹³⁾「最良の」，sunki-na⁽¹⁴⁾「王の」，pirradaziš⁽¹⁵⁾「早馬」，

KASKAL tukkina 「旅行用の⁽¹⁶⁾(?)」, IN-na 「牧草地にいる⁽¹⁷⁾(?)」, baramannuṣ
「首飾りをつけた」⁽¹⁸⁾, kullana 「(?)」⁽¹⁹⁾, kuttukkip 「(?)」⁽²⁰⁾, nutima(?) 「(?)」⁽²¹⁾,

表 2

recipient of fodder	year	month ⁽¹⁾	barley per day (QA)	10 5 4 3 2 1.5 1	kind of horses	text
			number of horses			
Aksuṣḍa	22	1-2[4] 2[5] 2[x]	33 32 ⁽²⁾ $x^{(3)}$	33		PF 1677, 1703, PFa 29 : 2-3, 4
Attehiya	25	1-2 3-7 8 9-12	2 7 2 6	2* 2* 5** 2* 2*	*KASKAL tukkina **punna	PF 1948 : 38-43, 44-45
Bakabada	22	1/2[1] 4	6 ⁽⁴⁾ 10	7* 3	*baramannuṣ	PF 1672, PFa 29 : 56-57
Harbezza	28	9 10-12	4 6	2 2 2 4		PF 1693
Irdazana		(1) (1)	7? 8?	1* 3? 1? 2 1* 3? 1? 2	*berna	PF 1648
Karkiṣ	23	1-2 12 (3.5)	1 5 5	1* 5 5	*punna	PF 1664, 1686, 1783
Kutimarka	19	1-2 3-12	5 3	5* 3*	*KASKAL tukkina	PF 1942 : 11-14, 15-18
Mirinzali		4 5-7	2 3	2 3*	*KASKAL tukkina	PF 1653
Pudaṣba	22	(1. 2) (6)	7 12	7 12		PF 2063, 2073 : 12-15
Umayā	21	4-9 10-11 12	x $x + y$ x			PF 1946 : 25-26, 55-56
Zinini		(1) (4)	6 6	6 6		PF 1680

(1) () は月数, [] は日数を示す。(2) PA. RU を含む。合計大麦 100BAR 受給。

(3) 合計大麦 116BAR 受給。(4) 他に PA. RU 20頭を伴う。

širadakka 「(?)」⁽²²⁾, sitmaka 「(?)」⁽²³⁾。各タームは2例を除き (PF 1635, 1765), berna/punna や他のタームと並記されることはない。多くの場合検出例が限られている上、現段階では語義を確定することができないものも少なくないが、これらの様々なタームの存在から判断して、馬群管理の現場では berna/punna あるいは支給量による区別以外にも必要に応じて多種多様な弁別基準が使用されていたことは疑いない。

さて表2は、同一人物が同一年に大麦飼料の受給を担当した馬群について月による頭数あるいは支給量の変化を検証することのできるテキストを整理したものである。これらの例は、年間を通じて馬群の一部あるいは全体の交替や補充が稀ではなかったことを推測させる。事実明らかに移動中の馬群を記録するテキストも少なくない。⁽²⁴⁾

長距離を移動中の馬群に関しては、王あるいはペルセポリス王室経済圏の最高責任者 Parnaka、スーサの宮廷の最高責任者 Bakabana など高官が発行した halmi 「押印文書」を馬群の責任者が携行していた事実を知ることができる。⁽²⁵⁾ この場合 halmi が王室の命令に基づいて移動する人馬に対して宿駅や通過地での食糧・飼料受給や宿泊施設の利用等を保証する一種の旅券の役割を果たしていたことは確実である。

表2や人馬の移動に対する halmi 発行の事実だけからも、ペルセポリス王室経済圏において馬が広範に利用されていたこと、そしてそれを保証するためのシステムの整備がすでに着実に進行していたことを窺い知ることができるであろう。そのようなシステムの効率的な運営のためには、まず各地の馬群構成と利用状況を正確に掌握することが必要不可欠な前提であることは言うまでもない。各地の穀物庫で作成される詳細な馬糧支給記録が、各穀物庫の支出記録であると同時に、ペルセポリス王室経済圏で利用可能な馬の登録記録であり、システム運営のための基礎的な情報を提供するための資料であったとみることに異論はないであろう。

III—1

前章で考察の対象とした馬糧支給記録のうち26例が、馬糧受給者の受給資格を mudunra と特別に規定する。そのコンテキストからみて、mudunra と呼ばれる人びとが馬群の維持管理あるいは利用と密接な関係をもつ存在であったことは容易に想像できる。⁽²⁶⁾ mudunra およびその複数形 mudunup というターム

は、現在利用しうる城砦文書の他の19例にも明記される⁽²⁷⁾。この結果、現段階で少なくとも30例の mudunra 名を確認することができる。うち9名は、mudunra⁽²⁸⁾の記載を欠くテキスト17例に馬群あるいは集団の責任者として再びあらわれる。これら17例を上記45例と同様に mudunra テキストと同定し、合計62例を mudunra の職務考察のための基本テキストとして抽出した。

Aksušda (PF 1677*, 1703, PFa 29:2-3*, 4*, 5-7*), Bakabada (PF 1673*, 1759, PFa 29:56-57*), Bakadada (PF 495*, 1017, 1599, 1663*), Bakamka (PF 1946:27-28), Bakatanna (PF 1793), Bakubbama (PF 1244, 1268, 1668*, 1669*), Bakuratsa (PF 1639), Dašapma (PFa 29:12-13), Karkašša (PF 1928), Karkiš (PF 1664*, 1686*, 1687*, 1783), Kunsuš (PF 1943:12-14), Kupilla (PF 1946:48-49, 50-51), Kurrašikka (PF 1946:29-30, 31-32, 33-34), Manada (PF 1018), Mannanda (PF 1084*, PFa 25, 29:42-43), Masana (PF 1943:9-11*, 1946:35-37, 38-39, 52-54), Mišdāya (PF 1263), Mišparna (PF 1638), Rakanda (PF 1764), Rukamma (PF 1641), Rumada (PF 1370), Ruzzakka (PF 1266, 1267, 1671*), Šāda (PF 1780), Turpiš (PF 1765, 1946:71-72*), Umartanna/Umartamna (PF 1367, 1946:73-76, 77-78), Umayā (PF 1942:4-6*, 1946:25-26, 55-56), Upriri (PF 440), Ušba (PF 1045), Zišnuka (PF 1199), Zitrapirzana (PFa 29: 8-9).

* は mudunra / mudunup の記載を欠くテキストを示す。

RF 1185, 1618, 1957:10-11 は mudunra 名を記載しない。

mudunra 中6名については、ペルセポリス王室経済圏における羊・山羊や牛の飼育管理に従事した経歴をもつことが検証されるが⁽²⁹⁾、mudunra の資格において馬以外の家畜飼養に従事している例は、馬群の中に一部騾馬が含まれている3例 (PF 1703, 1793, PFa 29:56-57) を除いてはない。したがって mudunra というタームは、特殊馬に関与する職名を示すとみなしてよい。⁽³⁰⁾

なお馬糧受給者の受給資格を規定するタームとしては、mudunra 以外に pa-⁽³¹⁾sanabattiš, manturrabattiš, hamarnabattiš, ukbašša, dasaziya⁽³²⁾ が検証される。このうち pasanabattiš⁽³³⁾については、このタームが必ず当該人物の所在地に先行すること、担当する馬群がすべて KASKAL tukkina「旅行用(?)」と規定されること、馬糧の割当・分配を担当する人物がいずれも halmi 発行の資格をもつ王室官吏であること、⁽³⁶⁾の3点を mudunra と区別される固有の特徴として指摘することができる。馬に関する何らかのより専門的な知識や技術を要求される

職務であったのかもしれない。他のタームについては、現在の史料状況の下では mudunra との共通性や相違点を特定することは不可能である。

mudunra は単独あるいは集団 (mudunup) で職務に従事した。構成員はすべて男性である。

mudunra とその同僚 (akkayaše) は šalup と規定され、通常 1 日 1.5QA の大麦／穀粉を受給する。彼らの配下には 1 日 1QA の大麦／穀粉を受給する libap と呼ばれる助手が存在するのが通例であった。libap というタームは m. puhu「少年」と置き換わることがある。しかし彼らに対する 1 日 1QA, すなわち 1 月 30QA (=3BAR) という支給量は、王室管轄下の労働者 (kurtaš⁽³⁸⁾) の成人男性に対する平均支給量に相当するので、mudunra 配下の m. puhu については字義通り「少年」と解釈する必要はないように思われる。また šalup・libap の区別は、成人男性を示す m.ruh という同一タームと支給量差によって表記されることもある。それゆえ mudunra 集団の構成員は、基本的に成年とみなされうる年齢以上に達していた男性であり、m. puhu というタームは当該者の補助的な立場を指示するためのものにすぎないとみなしてさしつかえないであろう。

上記 libap, m.ruh, m.puhu の各タームは、kurtaš 集団——ベルセポリス王室経済圏における生産活動のための最も主要な労働力——の構成員にも適用されるが、mudunra および彼らが統率する集団に関しては kurtaš の表示は 1 例もない。しかも mudunra 集団に対する食糧支給 (gal) 記録は、次の点で kurtaš テキストとは明らかに対照的である。① 3 例を除き (PF 1185, 1618, 1957:10-11) 必ず受給責任者として集団を代表する mudunra 名が記載される。kurtaš は原則として匿名である。② kurtaš テキストの多くに明記される da-mana/šaramana (支給割当・分配) 担当官に言及する例は皆無である。③ 支給総量は支給期間が 1 月を越える場合でも 1 日の支給量を基準に計算されることが多い。PF 1268, PF 1957:10-11 は半年にも及ぶ大麦支給の記録であるが、やはり 1 日の支給量を基準に計算している。kurtaš に対する支給は月単位で記録される。

mudunra 集団が、kurtaš とは異なる労働管理系統に属していたことは確実である。上述のような mudunra 集団の食糧支給に対する 1 日単位の計算方法の採用は、月途中の支給開始や停止を記録する PF 1045, 1263, 1266, 1946:73-76, 1957:10-11, PFa 29:5-7 の存在からも推察できるように、mudunra の職

務がしばしば移動を伴うものであったことを示唆する。管轄領域が限定される傾向にある damana/saramana 担当官が支給に介在しないことも同じ理由に起因するのであろう。mudunra 集団に対する支給は、移動中の他の多くの人々と同様、王や高官が発行する既述の halmi「押印文書」によって直接保証されていたに相違ない。また大麦中心の kurtaš と比較して、mudunra 集団に対する食糧支給が穀粉でおこなわれる頻度が高いことも移動中の人びとに対する支給の特徴と符合する。

なお mudunra が担当した馬群は、現在利用しうるデータでみる限り、主体は1日大麦 3-5QA を受給する馬で構成されている。すなわち成育段階に即して言えば、おおむね成馬に相当する。ただし PF 1946 中 mudunra による馬糧受給を記録する12項目のほとんどすべてについて、タブレット破損のために馬種を比定することができないので、mudunra の管理馬群から基礎的な調教を必要とする育成馬が意図的に排除されていたと判断するのは早計にすぎかもしれない。事実後述するように、mudunra が離乳後まもないと推定される幼駒を担当することもあった。

mudunra が統轄する同一期間の人員数と馬群規模をとともに確認できる例は限られているので、ここでは検証例を示すにとどめ両ファクターの相関関係については言及をさし控えたい。

mudunra 名	人員数	頭数	テキスト
Aksušda	33 šalup 120 libap	33	PF 1677, PFa 29:2-3, 5-7
Bakabada	1 šalup 49 libap	6 (+20 PA.RU)	PFa 29:56-57
Bakubbama	単 独	3	PF 1244, 1268, 1668, 1669

III—2

mudunra は、ペルセポリス王室経済圏における馬群管理において具体的にどのような役割を担ったのであろうか。

mudunra の職務を考える上でまず注目すべきは Bakadada である。Bakadada は第22—23年 Kušan 地区で馬群管理に従事していた šalup 2名と libap 8名の集団 (mudunup) を代表し、この集団に対する食糧支給を受領、各自に配分する一方 (PF 1017), Kušan 地区を管轄下におく Kurištiš 地区の穀物庫から運ばれた飼料用大麦 (Ú) を受領・保管する (PF 495)。さらに Kušan 地区で飼育されている幼駒に対する大麦の割当量を1日 1QA と決定、同じく Kurištiš

地区の穀物庫に2頭・2ヵ月分の大麦支給を要求している (PF 1663)。

Bakadada が担当した馬自体に言及するテキストは PF 1663 のみであるが、mudunra の担当する馬群の多くが1日 3-5QA の大麦を受給する馬で構成されていたことを想起するならば、Bakadada の下にもこの2頭の幼駒以外に何頭かの成馬群が存在したと推測することが可能である。2頭はいまだ1QAしか受給していないので、Bakadada の要求は離乳後あらたに大麦飼料を与えられるようになった幼駒のための特別要求であったのかもしれない。ともあれ mudunra の資格を知る上では、Bakadada が幼駒に対する支給量の決定を自ら担当していることが重要である。なぜならば幼駒はまさに発育成長の途上にあり、とりわけ発育状況を明確に識別し各馬の成育に適合した飼料と運動が按配されねばならない段階だからである。Bakadada が基礎的な調教を含め馬の飼育管理に関して豊富な経験の持ち主であったことはおそらくまちがいない。⁽⁴¹⁾

ところで Kurištiš 地区の穀物庫は、Kušan をはじめ Baktiš, Kansan, Muran など近隣一帯を統轄する地域のセンターとして機能していた。⁽⁴²⁾ しかも Kušan 地区で大麦が生産されていたにもかかわらず (PF 447, 1593, 1876), Bakadada が Kušan ではなく Kurištiš の穀物庫から直接馬糧を受給している以上、Bakadada に委ねられていた馬は Kurištiš の穀物庫の管轄下にあったとみなすべきである。穀物庫の官吏による馬の利用は、PF 1688, 1691, 2064 などいくつかのテキストによって例証することができる。おそらく Bakadada の飼養馬は、Kurištiš の穀物庫に配属された王室官吏のために提供されたのであろう。あるいは Kurištiš 近辺の地域で共同利用されたのかもしれない。いずれにせよ一般に馬の飼養地は牧草地と水の供給源によって限定され、利用地と日常の飼養地が必ずしも至近距離にないことは珍しいことではなかった。⁽⁴³⁾

以上 Bakadada の例からひとまず mudunra とは地域の公的利用に応じるための馬群の維持管理に従事する集団の最終的な責任者であり、馬糧の調達・保管、各馬の発育・健康状態のチェックや調教、さらには自らが統率する労働集団に対する食糧支給の受領等の任務を負う、と要約することができるであろう。

ただしペルセポリス周辺の Rakkan や Hadaran 地区のように同一地区内に複数の mudunra が存在する場合には、地区所属の馬群全体を統轄すると推定される王室官吏の配置によって各 mudunra の自律性は幾分制約されたようである。たとえば第21年の Rakkan 地区では mudunra と明記される6名が馬の飼養に従事していたが (PF 1946)、このうち5名の馬群に対する大麦飼料の割

当・分配を担当したのはすべて Irtaḫḫawukša であり、各 mudunra ではなかった。Irtaḫḫawukša による 5 名の mudunra に対する馬糧の割当は、ペルセポリス⁽⁴⁵⁾にいる高官の 1 人 Iršena の halmi によって最終的に保証されている。Irtaḫḫawukša は同年 Rakkan にいた manturrabattiš の馬群に対しても Iršena の halmi に基づいて大麦飼料を割り当てているので (PF 1947:88-89, 90-92), Iršena が Rakkan 地区に派遣した馬群管理の総責任者であったとみなしてさしつかえあるまい。Rakkan 地区に配属された各 mudunra は Irtaḫḫawukša の指揮下に馬群および飼養地（放牧地）を割り当てられ、また Irtaḫḫawukša を通して馬糧を受領したのであろう。しかしテキストの記述は各飼養地における馬群管理の責任自体は mudunra にあったことを示しているの、各 mudunra の基本的な日常の職務は、前述の Bakadada の場合と大差がなかったと考えてよい。Irtaḫḫawukša が関与しない馬群は、何らかの理由で Rakkan に逗留していたのであろう (PF 1946:61-62, 71-72, 73-76, 77-78)。

このような Rakkan 地区における Irtaḫḫawukša の特別の配置は、この地が頻繁な馬の利用が予想されるペルセポリスやペルセポリスに隣接する王室経済最大⁽⁴⁶⁾の中心地 Matezziš を控えていたことによるものと推論できる。上記 PF 1946は確認しうる34項目中14項目が馬糧支給を記録、他に羊・山羊と牛に対する大麦支給記録各 3 例を含む。Rakkan 地区が家畜飼養の条件に恵まれた地域に位置していたことは明らかである。ペルセポリスや Matezziš の需要に応えるために選ばれたこの飼養適地では、とりわけ地区内の馬群をより正確に掌握することが要求されていたに違いない。

特にペルセポリスとの関係を考える上では、Rakkan あるいは Hadaran で飼養される馬群に対する大麦支給の多くが Iršena の halmi によって直接保証されていたということは興味深い。Iršena は自らはペルセポリスにあって中央の王室経済業務に携る一方、kurtaš の労働管理に関しては王室経済圏西部全域の最高責任者としての権限を与えられていた王室経済の中枢部に位置する人物であった⁽⁴⁷⁾（第17—23年）。迅速・的確な情報収集と指令伝達は Iršena の任務遂行上の必須の要件であったはずである。また時には自ら管轄区各地を視察することもあったであろう。Iršena にとって交通・通信の手段として馬がもつ重要性はきわめて大きい。事実 Irtuppiya や Zinini, Mirinzana など Iršena と同様広範な地域を対象に、あるいは各地を巡回して王室経済業務に従事する官吏は自ら長期間にわたって馬糧を受給している⁽⁴⁸⁾。ただし Iršena の halmi を与え

られた Rakkan や Hadaran の馬については、もっぱら Iršena の職務遂行のためにのみ利用されたと断定しうる証拠はない。むしろ Iršena による halmi 発行は、ペルセポリスに勤務する王室官吏を代表する彼の主要な任務の一つとみるのが妥当であろう。

PF 1957:10-11 は、スクドラ（トラキア？）人「少年」2人が mudunup として6カ月と8日間 Takmašbada を介して大麦支給を受けとったことを記録する。PF 1957 は、ペルセポリス王室経済圏西端近くに位置したと推定される Udarakka ⁽⁴⁹⁾ 砦 (halmariš) の第22年の大麦収支記録である。Takmašbada については、同年当該地区あるいはその周辺で馬、駱駝の飼育管理に従事していたことが検証できる (PF 331, 1957:7-8, 9)。第23年のある時期には自ら馬群を率い他地区に赴いているが (PF 1960:12-14)、第24年には再び Udarakka 地区で駱駝の飼育管理に従事している (PF 77)。Takmašbada 配下の匿名のスクドラ人 mudunup 2名が1日 1.5QA の大麦を受給しているにもかかわらず「少年」と表記されていることから判断して、彼らが多忙な Takmašbada の馬群管理部門を補助する目的で派遣されていたことはまずまちがいない。辺境の砦において情報収集・伝達のための手段として馬の適切な ⁽⁵⁰⁾維持管理が必要不可欠であることは言うまでもあるまい。しかも PF 1978 によれば、Udarakka 砦の周辺では馬・駱駝に加えて騾馬や牛も飼養されていたようである。Udarakka 砦もまた家畜飼養に適した地域を控えていたことは明らかである。Udarakka 砦近くの Hišema, Tašpak, Šurktur 地区にも mudunra の存在を確認することが ⁽⁵¹⁾できる。

上記 Takmašbada という名は、ダーラヤワウ1世即位直後のサガルティア叛乱鎮圧のために派遣されたペルシア・メディア軍を指揮するメディア人司令官の名としても知られている (DB 33:61-63)。もし両者が同一人物であるとすれば、Udarakka 砦の防衛上の重要性和同時に、砦における馬の利用価値もさらに大きくなるとみななければならない。

以上の諸事実を総合するならば、mudunra/mudunup が交通・通信の手段として利用される公用馬に対する近隣地域の需要に応えることを第一の目的に、飼養適地に配属され馬群の維持管理に従事した人びとであったことはもはや疑いない。

さて地域の需要に応えるという課せられた任務の性格上当然のことながら、mudunra の担当する馬群は必ずしも一定ではない。mudunra は地域の要請に

応じ飼養馬を提供するのみならず、あらたな馬を受容することもあった (PF 1946:25-26, 55-56)。後者の場合には馬群の補充以外に、育成馬あるいは疲弊馬の調教・看護ということがあったのかもしれない。

さらに mudunra 自身が利用地の変更に伴い馬群とともに移動することもあった。たとえば Mannanda は第22年第2月 Šullakke から44頭の馬群とともにペルセポリス・スーサ間の宿駅 Kurdušum に到着、5日間の滞在の後、おそらく14頭を Kurdušum に残し、⁽⁵²⁾30頭を正規の駅路を通らない4日の行程で Baššamsura に「運んだ」(kutišta) (PFa 25, 29:42-43)。第21・22年の Kurdušum の記録は、この宿駅がきわめて頻繁に利用されていたことを立証する。Kurdušum に残された14頭は駅馬の補充であったのだろう。また PFa 25 が Mannanda の馬群の移動を kutišta と表現している事実は、この場合馬群の移動そのものが目的であること、換言すれば王室の指令に基づく利用地の変更であったことを示している。この馬群の移動には Mannanda の同僚あるいは助手が少なくとも14名参加していたはずである (PF 1084)。

mudunra の移動の多くは Mannanda と同様、利用地の変更に伴うものと筆者は考えている。⁽⁵³⁾mudunra の派遣地の変更は、Turpiš: 第21年第3—7月 Rakkan (PF 1946:71-72)→第22年第12月 Muran (PF 1765), Umayā: 第19年第10月 Hadaran (PF 1942:4-6)→第21年第4—12月 Rakkan (PF 1946:25-26, 55-56) の例からも確認することができる。⁽⁵⁴⁾

王や王族の旅行に同行する mudunra も存在した。第21年第7-8月の25日間 Rakkan 地区で x 頭の bariš「最良」馬のために大麦飼料を受領した Umartanna は、勅命によって選ばれ、šalup 93名・「少年」180名の大集団を率いる mudunra である (PF 1946:73-76, 77-78)。Umartanna に対する馬糧支給は、上述の Rakkan の馬群管理の総責任者 Irtaḫḫawukša を仲介しない。第21年第8月に王がペルセポリスを訪れたことは PFa 30:8-10 から確実であるので、Umartanna たちが Rakkan で世話する「最良」馬がスーサからペルセポリスに旅する王の一行が利用する馬群、少なくともその一部、であったことはまちがいない。Umartanna は、mudunra テキストの検証例中最大の合計472名の mudunra 集団を率いて PF 1367 に再びあらわれる。さらに PF 1793 は、第19年第7月 Karakušan (Rakkan 管轄地域内) で「王と王子の」(sunki-na āk misapušašpe-na) 馬と騾馬を飼養する Bakatanna という名の mudunra とその同僚、合計135名を記録する。この135名に対しては、ペルセポリス王室経済圏の最高責任

者 Parnaka がペルセポリスの家畜長 (kāsabattiš) Harrēna に特別に命じて羊・山羊合計13.5頭が支給された。食糧としての羊・山羊支給例の約 $\frac{2}{3}$ は王や王族、高官に関係するものである。⁽⁵⁵⁾ Bakatanna たちも Umartanna 同様王の巡遊に随行してきたのであろう。

上記3例から王の巡遊時の馬群規模を算定することは不可能であるが、これら mudunra 集団の人員数、あるいは宿駅に滞在する「王の前で」(sunki tibba)の破格の馬糧消費量からみて (PF 708, 709), ⁽⁵⁶⁾ 一行がきわめて大規模な馬群を伴っていたことは否定しがたい。

また時には mudunra 自身が王や高官の使者として派遣されることもあったようである。たとえば Rakkan 地区の mudunra としてあらわれる Umayā は、ある年の第9月王の halmi を携え pirradaziš「早飛脚」としてスーサからペルセポリスに派遣されている (PF 1335)。一方 Bakabada は、第22年第1—2月のある日、王の halmi を携え libap 49名とともに馬6頭・騾馬20頭を率いて宿駅 Kurdušum を通過してアレイアに赴いた (PFa 29:56-57)。PF 1438 はアレイアから王の下に赴く途中の Bakabada について報告しているので、おそらく Bakabada の一行はスーサの王とアレイアの間を往復したのであろう。事実第22年第4月にはすでにペルセポリス(?)で10頭の馬糧を受給する Bakabada を発見することができる (PF 1673)。第25年第5—8月の馬糧支給記録は、Bakabada を mudunra と明記する (PF 1759)。Bakabada は第23年第1月にも王の halmi を携え12名の šalup のリーダーとして、おそらく特殊な任務をおびて派遣されているので (PF 1082), ⁽⁵⁷⁾ スーサ—アレイア間の往復も王あるいはスーサの高官の使者として派遣されたものとみなしてさしつかえないように思われる。使者としての派遣は mudunra に課せられた臨時の任務にすぎなかったのであろうが、少なくとも mudunra の一部は王室からかなり高い信頼を得ていたと言えそうである。王の巡遊に随行する大規模な mudunra 集団と馬群を統率するために選ばれた既述の Umartanna や Bakatanna も、その例に加えてよいであろう。

そのように考えることが許されるならば、すでに本節のはじめでとりあげた Bakadada がまさに mudunra の資格において lipte kuktup「射手」のための穀粉を受領しているという事実は (PF 1599), mudunra の下に治安警備の要員が配属されることもあったと解釈すべきなのかもしれない。⁽⁵⁸⁾ そもそも移動および情報収集・伝達の最も有効な手段を手元に有し、しかも王室の指令に応じて

馬群とともに移動する *mudunra* が、飼養地周辺や移動途中の要地を巡察し治安維持や情報収集に努めたとしても不思議ではない。

なお *mudunra* として単独で馬群管理に従事した *Bakubbama* に対する食糧・馬糧支給記録はすべて、ペルセポリス王室経済圏西端の *Šurktur* を受給地とする (PF 1244, 1268, 1668, 1669)。しかも第19・22年ともに *sunki-na*「王の」と修飾される1日大麦 3QA を消費する3頭の馬を担当している。しかし *Bakubbama* のように飼養地や馬群が固定されていたことを予想させる例は、全体からみれば特異である⁽⁵⁹⁾。

城砦文書には、*mudunra* としての職務期間中の馬の損失や、それに対する *mudunra* の補償義務等に関する規定を知るための手がかりは何もない。

IV

本稿は、城砦文書を手がかりにペルセポリス王室経済圏における公用馬管理の問題を考察した。その結果、王室が各馬の成育・健康状態を正確に把握していたこと、主要な利用基地近くの飼養適地に *mudunra* と呼ばれる馬群の維持管理に従事する人びとを配置し周辺地域の要請に応えていたこと、*mudunra* およびその馬群——一部もしくは全体——を適宜移動させ各地の需要の変化に対応していたこと、が確認できた。

交通・通信網の整備拡充は、即位直後の諸叛乱を鎮圧し帝国の再編成を進めつつあるダーラヤワウ1世にとって焦眉の急務であったはずである。ペルシア人が帝国統治の手段として馬を積極的に利用したことは、すでに早飛脚の制度や宿駅制度の充実を伝える同時代のギリシア人の驚嘆に満ちた記述から窺い知ることができるが (Hdt. V 52-54, VIII 98; Xenop. *Cyropaedia* VIII vi 17-18), ペルセポリス王室経済圏における本稿の事例はより明瞭な形でそれを証明する。⁽⁶⁰⁾ スーサに帝国行政の中心を置かざるをえなかった支配者にとって、ハカーマニシュ朝発祥の地パールサにおける馬利用システムの整備は、スーサとの迅速かつ緊密な連絡を維持するためにも、いまだ流動的な王室経済機構⁽⁶¹⁾を円滑に運営するためにも、とりわけ緊急の課題であったに違いない。*mudunra* は、そのような積極的・広範な公用馬利用を保証するシステムのまさに中核を占める存在であったと言える。ただし各 *mudunra* に委ねられた権限は必ずしも一様ではない。現在利用可能な史料からは、*mudunra* の出身基盤を同定しうるような確たる証拠を得ることはできない。

公用馬の維持管理に従事する mudunra の職務の分析を徹底させるためには、本稿で充分にとりあつかうことのできなかった王室官吏による馬糧受給例のさらに詳細な検討が必要であることは言うまでもない。この問題に関しては、稿をあらためて論じることしたい。

注

- (1) Cf. Strabo. XV 3₁₈.
- (2) E. g. P. R. S. Mooney, "The Iranian Contribution to Achaemenid Material Culture," *Iran* XXIII (1985), pp. 22-32.
- (3) 馬や騎馬像はハカーマニシュ朝期を通じてペルシア人が最も愛好した意匠の一つであった e. g. A. Farkas, "The Horse and Rider in Achaemenid Art," *Persica* IV (1969), pp. 57-76; D. Stronach, "Achaemenid Village I at Susa and the Persian Migration to Fars," *Iraq* 36 (1974), p. 243 f. Cf. G. R. Driver, *Aramaic Documents of the Fifth Century B. C.*, Lodon, 1957, Letter IX.
- (4) E. Herzfeld, *The Persian Empire*, Wiesbaden, 1968, pp. 1-34; M. A. Littauer and J. H. Crouwel, *Wheeled Vehicles and Ridden Animals in the Ancient Near East*, Leiden/Köln, 1979, pp. 144-160; S. Bittner, *Tracht und Bewaffnung des persischen Heeres zur Zeit der Achämeniden*, München, 1985, pp. 226-241; 加茂儀一, 『騎行・車行の歴史』法政大学出版局, 1980年, pp. 43-46, 54, 58 f.
- (5) R. T. Hallock, *Persepolis Fortification Tablets*, Chicago, 1969 [=PFT]; *id.*, "Selected Fortification Texts", *Cahiers de la DAFI* 8 (1978), pp. 109-136.
- (6) 最近のハカーマニシュ朝ペルシア帝国再検討の試み・提言については, e. g. H. Sancisi-Weerdenburg, "Achaemenid History Workshop," *Persica* XI (1984), pp. 185-196; P. Briant, *L'Asie Centrale et les royaumes proche-orientaux du premier millénaire*, Paris, 1984, pp. 7-10.
- (7) PF 707-709, 1394, 1397, 1508, 1570, 1635-1704, 1757-1778, 1780-1785, 1793, 1833, 1834, 1877, 1878, 1942: 4-6, 7-10, 11-14, 15-18, 19-22; 1943: 9-11, 12-14; 1944: 39-41, 42-44, 45-47, 48-51, 52-54, 55-57; 1946: 25-26, 27-28, 29-30, 31-32, 33-34, 35-37, 38-39, 48-49, 50-51, 52-54, 55-56, 61-62, 71-72, 73-76, 77-78; 1947: 78-80, 81-82, 83-85, 86-87, 88-89, 90-92; 1948: 34-37, 38-43, 44-45; 1953: 36-37, 38-39; 1957: 9, 1960: 12-14, 2056, 2060-2065, 2073: 12-15, 21-23; PFa 24, 25, 29: 2-3, 4, 8-9, 10-11, 12-13, 42-43, 56-57; 31: 8-9. 他に未公開テキスト 8 例が馬に言及すると報告されている。PFT p. 667.
- (8) PF 1677: bel 1-na 「1 歳の」
- (9) Cf. W. Hinz, "Achämenidische Hofverwaltung," *ZA* 61 (1971), p. 285.
- (10) アルタイ山地バズィルィクのスキタイの古墳(前5—4世紀)では去勢馬の存在が確認されている。M. A. Littauer and J. H. Crouwel, *op. cit.*, p. 148 n. 22. なおペルセポリス・アパダーナのレリーフに描かれる馬はすべて種牡馬である。E. R. Schmidt, *Persepolis I*, Chicago, 1953, pp. 85-90.

- (11) たとえば Zinini は馬 6 頭の大麦飼料を第 8—12 月の 5 カ月間受領 (PF 1680), 同じく Zinini は馬 6 頭のぶどう酒の特別支給を第 25 年 5 カ月間受領している (PF 1773)。両テキストが同一馬群を対象としていることはまちがいない。さらに特別支給の一種 hadazanam は通常の大麦支給記録に並記されることがある (PF 1638, 1641, 1645, 1656, 1666, 1697, 1948: 34–37, 38–43, 44–45; 2060)。定期支給との並記の事実は、栄養補給としての特別支給の性質をより明瞭に示すように思われる。hadazanam の語義については, PFT p. 49 f.; W. Hinz, *Altiranisches Sprachgut der Nebenüberlieferungen*, Wiesbaden, 1975, p. 109 f.
- (12) Cf. PF 1661・1763, PF 1662・1776.
- (13) PF 1394, 1764, 1781, 1946: 73–76. W. Hinz, *Neue Wege im Altpersischen*, Wiesbaden, 1973, p. 41 f.; *id.*, *Altiranisches Sprachgut*, p. 64.
- (14) PF 1668, 1669, 1765, 1784, 1793.
- (15) PF 1672, 1700, 2061, 2062, 2065. PFT p. 42.
- (16) PF 1650–1655, 1942: 11–14, 15–18; 1946: 48–49, 50–51; 1947: 78–80, 81–82, 83–85, 86–87; 1948: 44–45, PFa 31: 8–9. PFT p. 763.
- (17) PF 1681–1683, 1946: 71–72. PFT p. 48.
- (18) PF 1673. M. Mayrhofer, *Alltagsleben und Verwaltung in Persepolis*, Wien, 1973, p. 197 n. 25; Hinz, *Altiranisches Sprachgut*, p. 63.
- (19) PF 1670, 1765.
- (20) PF 1766.
- (21) PF 1635.
- (22) PF 1946: 61–62.
- (23) PF 1758, 1946: 33–34. Cf. Hinz, *Neue Wege*, p. 97; H. Koch, “‘Hofschatzwarte’ und ‘Schatzhäuser’ in der Persis,” *ZA* 71 (1982), p. 235 n. 10.
- (24) PF 1394, 1397, 1508, 1570, 1639*, 1703*, 1704, 1780–1782, 1783*, 1784, 1785, 2056, PFa 24, 25*, 29: 4*, 8–9*, 10–11, 12–13*, 42–43*, 56–57*. * は後述する mudunra テキストを示す。
- (25) 王による公布: PF 1394, 1397, 1508, 1570, 1784, 1785, 1942: 19–22, 2056, PFa 29: 56–57. Parnaka: PF 1780–1782. Bakabana: PF 1783.
- (26) 語義不明。Cf. PFT p. 40; Hinz, *Neue Wege*, p. 82.
- (27) 未公開テキスト 4 例が mudunra / mudunup に言及することが報告されている。PFT, p. 734.
- (28) 集団の代表者としてあらわれる場合については mudunra 在職中であることを確認できるテキストに限定した。
- (29) Bakabada: PF 695. Bakuratsa: PF 64, 2011. Karkašša: PF 1955. Karkiš: PF 1956, 2082. Rumada: PF 692, 693. Turpiš: PF 72, 2012.
- (30) もし PF 1571 の ba-ru という表記が PA.RU の誤りであるとすれば, 受給代表者 Turpiš は 6 カ月前には mudunra として馬群管理に従事していたことが確認できるので (PF 1765), PF 1571 は mudunra が騾馬だけで構成される畜群を担当した例とみてよいのかもしれない。ただし各 ba-ru の一日の大麦支給量 5 QA は騾馬とし

- ては異例である。Cf. PFT p. 45.
- (31) PF 1942: 11-14, 15-18; 1947: 78-80, 81-82, 83-85, 86-87. PFT pp. 40, 742.
- (32) PF 1942: 4-6, 7-10; 1947: 88-89, 90-92. PFT pp. 40, 724.
- (33) PF 1943: 9-11. PFT p. 689; Hinz, *Neue Wege*, p. 93.
- (34) PF 1834. *Ibid.*, p. 93.
- (35) PF 1942: 19-22. Cf. Hinz, *Altiranisches Sprachgut*, p. 86; H. Koch, “Steuern in der achämenidischen Persis?,” *ZA* 70 (1981), p. 123.
- (36) 注(47)参照。
- (37) ハロック、ヒンツともに *šalup* 「貴族／主人」 *libap* 「従者／奴隸」と解釈する。PFT pp. 720, 753; Hinz, *Neue Wege*, p. 99. ビーストゥーン碑文では *šalup* とおそらく同語幹の派生語 *šaluwut* がハカーマニシュ家の人々の身分を示すために用いられている (DB 3: 6, DBa 7f.)。バビロニア語版では「貴族」と訳されているが、キャメロンが指摘するようにむしろ「自由人」と解釈する方が適当であるように思われる。*šalup* についても同様。事実城砦文書に記録される *šalup* に対する支給量は、ペルシア人貴族の出身と推定される高官に比較すればはるかに少量である。G. G. Cameron, “The Elamite Version of the Bisitun Inscriptions,” *JCS* 14 (1960), p. 62. *libap* については、佐藤進「アカイメネス朝王室経済の労働者 *kurtaš* について」『オリエント』第16巻1号 (1973), p. 16 f. 参照。
- (38) *kurtaš* については、佐藤、前掲論文、同「アカイメネス朝ペルシア王室経済の研究(二)」『東京教育大学文学部史学研究』第106号 (1976), pp. 1-17, T. Kawase, “Female Workers ‘*pašap*’ in the Persepolis Royal Economy,” *Acta Sumerologica* 6 (1984), pp. 19-31 参照。
- (39) 後述するように *m. puhu* と規定されるスクドラ人 *mudunup* は *šalup* の支給量に相当する1日大麦 1.5 QA を受領している (PF 1957: 10-11)。
- (40) PFT p. 27 f; R. T. Hallock, “The Evidence of the Persepolis Tablets,” *The Cambridge History of Iran* II, Cambridge, 1985, pp. 593-596.
- (41) *mudunra* による幼駒担当当は他に PF 1664, 1673, 1946: 35-37, 52-54 が検証される。
- (42) 現在利用しうる *Kurištiš* の記録はすべて *Kurištiš* の大麦が近隣地区の労働者や馬のために供給されたことに言及する (PF 495, 850-853, 966, 1663, 1664, 1857)。とりわけ *Baktiš*, *Kansan*, *Muran* については当該地区の担当官を介さないで支給がおこなわれた。
- (43) たとえば太田阿山編『中央亜細亜より亜拉比亞へ 福島將軍遺蹟續』東亜協會, 1943年 pp. 26-37 によれば、福島はシーラーズ・イスファハーン間の駅で駅馬が遠く離れた放牧地にいるため駅馬の交替に時間を空費したことをしばしば嘆いている。なお *Kurištiš* の穀物庫からは *Kušan* 以外に *Baktiš* 地区にも第23年第1・2月馬糧が支給された (PF 1664)。受領責任者 *Karkiš* は同年第12月には確かに *mudunra* と呼ばれている (PF 1783)。
- (44) *Rakkan* の仕訳帳にはペルセポリスをはじめペルセポリスに近接すると推定される *Appištapdan*, *Tukraš* が含まれる。Hallock, “Selected Fortification Texts,” p. 116.

Hadaran については, *ibid.*, p. 114.

- (45) PF 1946, 1947 の šaramana 担当官, halmi 発行者のテキスト欠損部の再構はハロックに従った。各項目の配列, 欠損部のスペースからみてハロックの再構に誤りはないと思われる。
- (46) R. T. Hallock, “The Persepolis Fortification Archive,” *OrNs* 42 (1973), p. 322; *id.*, “The Use of Seals on the Persepolis Fortification Tablets,” in: Mc. Gibson and R. D. Biggs (eds.), *Seals and Sealing in the Ancient Near East*, 1977, p. 130; *id.*, “The Evidence of the Persepolis Tablets,” p. 595 f. Cf. M. W. Stolper, “The Neo-Babylonian Text from the Persepolis Fortification,” *JNES* 43 (1984), p. 306 f.
- (47) 第19年の Hadaran で Iršena と同様馬糧支給のための halmi を発行した Masdayašna も (PF 1942: 4–6, 7–10), 第21–24年には確かにペルセポリス・Matezziš 地区の王室官吏としてあらわれる。Iršena, Masdayašna とともに KASKAL tukkina 「旅行用(?)」馬を担当する pasanabattiš に対する馬糧支給に対しては自ら割当・分配を担当している (PF 1947: 78–80, 81–82, 83–85, 86–87; 1942: 11–14, 15–18)。
- (48) Irtuppiya: PF 1681, 1699, 1700, 2062. Zinini: PF 1680, 1773. Mirinzana: PF 1953: 36–37. Irtuppiya はペルセポリス王室経済圏西部の各地で, おそらく Iršena の代理人として, halmi 発行, 支給物資の管理, 支給割当・分配, 受領の代理人等, 実に広範な活動をおこなっている。PF 1700. 2062 の各馬は pirradaziš 「早馬」であった。Zinini, Mirinzana はともに各地の会計簿の作成に深く関与した人物である。Hallock, “Selected Fortification Texts,” p. 113. Mirinzana には不正を働き逃走中の官吏の逮捕・調査が命じられることもあった (PFa 28)。
- (49) Udarakka 地区関係者に対するおどう酒支給の担当官としてあらわれる Ibaturrea は (PF 1110. 1111) 西ボーダー近くに位置する Tašpak のおどう酒支給にも関与する (PF 344. 2029)。Tašpak および後述の Hišema, Šurktur については, Hallock, “The Evidence of the Persepolis Tablets,” p. 597.
- (50) PF 1978: 14–16 によれば Udarakkan 地区の穀物庫の管理人 (amparabaraš) の死後, 管理人が入手・利用していた騾馬を委ねられた Annamasa が aššabattiš (<OP *asa-pati-「馬の司」) と特別に規定される。ただし Annamasa と Takmašbada の馬群やスクドラ人 mudunup との関係は不明。Cf. Hinz, *Altiranisches Sprachgut*, p. 43; Hallock, “The Evidence of the Persepolis Tablets,” p. 604 f.
- (51) 後述する Ruzzakka, Bakubbama を参照。PF 1655, 1672, 1770 も mudunra の記載を欠くが当該地域における馬糧支給を記録する。
- (52) PFa 25 末尾は14頭に baššabara 支給が与えられなかったことを付記する。baššabara とは正規の駅路を通らずに移動する人馬に対して 出立前に与えられる 次の支給地までの食糧・馬糧である。baššabara の語義については, PFT p. 47 f; Hinz, *Altiranisches Sprachgut*, p. 184.
- (53) 注②4 mudunra テキスト参照。
- (54) Ruzzakka は第19年2カ月と20日間の食糧支給を Hišema の穀物庫から, 3カ月分を Šurktur で受領した (PF 1266, 1267)。
- (55) 拙稿「Haxāmaniš-朝初期における小家畜管理」, 『国立民族学博物館研究報告』第

4 卷 1 号 (1979), p. 625.

(56) Cf. PF 707.

(57) 1 月分の *baššabara* を携えて出発している。

(58) *mudunra* 在職中か否かは不明であるが *Bakadada* は *telnup* 「騎乗者・騎兵」のための穀粉を受領することもあった (PF 1179)。*Bakabada* についても *lipite kutira* 「射手」との関係を指摘することができる (PF 1256)。

(59) PF 440 は種用大麦を受けとった *mudunra* について報告する。*Bakubbama* のような場合であれば馬群の世話と並行して大麦栽培に従事することも可能であろう。

(60) Schmidt, *op. cit.*, p. 156.

(61) 拙稿「ペルセポリス出土「城砦文書」における *kapnuški* 再考」, 『西洋史学』第 137 号 (1985), p. 51 f.